

雜纂

伯林懷古

阪倉篤太郎

伯林滞在の一年間に、わたしは暇さへあれば市内や近郊を散策し、名勝舊蹟を探ることな怠らなかつたが、特にわたしの史的興味をそつたのは、現今の大伯林の萌芽たる舊伯林を徘徊して、その遺蹟を訪ふことであつた。それがためにわたしは、巡覽の道順を表に作つたり、寫眞繪葉書を集めたりしたので、それを空しく篋底にしまひこむのも惜しい氣持がするから、ここにその中の趣味あるものに就いて紹介することにした。

一 伯林市發達史の概要

今の大伯林市は、もとキヨルン (Köln) 市とベルリン (Berlin) 市との合同した舊伯林の更に成長したもので、シュプレー (Spree) 河の廣い谷々、

これを挟む南北二つの高原の斜坂に位する都市である。抑都市の基が開かれる動機としては、單に景色のやうな美的條件では充分でなく、常に純實用的見地からその天然の地勢に重きをおくのは言ふまでもないことで、伯林も勿論その例に洩れないものである。北にはワインベルク (Weinberg) 南にはクロイツベルク (Kreuzberg) といふ丘陵があるが、それによつてシュプレーの下流にできた隘路は、河の兩側に在る廣い谷間の平原に反して、平易に渡ることのできる地點を成したもので、

殊に東の方ハーフェル河畔のブランデンブルク

(Brandenburg a. d. Havel)と、西の方オーデル河

畔のフランクフルト(Frankfurt a. d. Oder)との間

に於て、南北の方向に通ずる橋となるには、このシ  
ュプレーの中島より以上のすぐれた場所は見出さ

れない。即ち兩側には商人の恐れる暗黒な森林も  
なくて、豊饒な田畑があるのみならず、その谷を

越える路は短く且便利であるから、かういふ場所  
に將來の發展を見込んで植民がなされたのは當然

である。實にキョルンペルリンが今日の大を成  
したのは、その地形上發展の餘地を持つてゐたこ

と、即ち容易に背後の岡に上つて、妨げられずに  
上の方へ段々成長して行くことができたためで、

此點に於ては附近の他の地點、例へば西北のシュ  
パングウ(Spandau)と東南のキョベニツク(Cöpe-

nick)——水流の間にあつて難攻不落の城砦を建

設するには適してゐるが、擴大する餘地を持たな

い——などの到底及ぶところではなかつた。

さて現今の大柏林市民約四百萬人の住む、家屋  
の波が起伏してゐる谷や岡は地質學上、氷河時代

即ち洪積世に出來たものといはれ、その谷を流れ  
るシュプレーは、今こそ廣い平原の中に細い絲の

やうであるけれども、古く氷河溶解時代には逆卷  
く大激流がこの廣い谷に溢れた、と信せられたこ

ともあるが、兩岸の地形の研究によつて實際はさ  
うでなかつたことが認められるにやうになつた。

即ちこの谷は山脈が形づくられたのと同じ作用で  
流水のために削り成されたもので、昔は今よりも

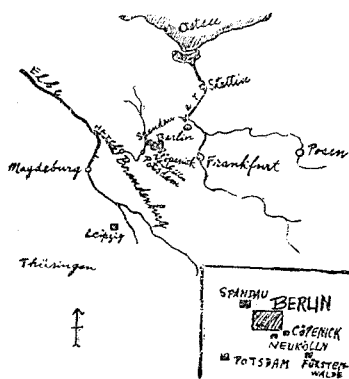
大きな流がこゝを奔つてゐたには相違なからうが  
決して水が河床全體を充したことはなくて、最初

の植民がこの土地に入り込んで來た時も、その地  
形は今日とたいして異なつてはゐなかつたらうと

いはれてゐる。

次にこの地の住民がどこから來たかといふこと

は審かでないが、最も古い者は已に石器時代（紀元前四千年乃至二千年頃）に住んでゐて、文化上の地方は殆ど全原始時代を通じて、西部東海（Ostsee）の周圍を中心地域とする北方文化圏に屬した。當時柏林の町々は已に交通の衝に中つたやうで、通商路は南ライプチヒ（Leipzig）及びチューリッゲン（Tübingen）から北シユテツテイン（Stettin）、また西マग्デブルク（Magdeburg）から東ポーゼン（Posen）へ、更にそこから遙かに東方へと通じてゐた——このことは舊柏林の博物館島で發見された土器や、シユレジャ（Schlesien）の藪に遺された特殊の形の斧が、チューリッゲンの製作品であつたことで確かめられた——この交通路にあたる柏林地方に定住民が居つたことを證明する材料は、原始時代のあらゆ



（圖一第）

る時期を通じて發見されるが、その原始住民が如何なる種族に屬するものであつたかは、決定するに甚だ困難である。即ち石器時代以降はインド・ゲルマン民族であつたが、青銅器時代（紀元前二千年乃至八百年頃）の間、有史以前の柏林は西北に於けるゲルマン民族と、東南に於ける他のインド・ゲルマン民族との境界に位したから、その何れとも判断し難く、鐵器時代の初（紀元前八百年頃以後）に至つて漸く純ゲルマンとなつて、人種移動時代まで續いて來た——このゲルマン英雄時代の貴重な記念物は、ノイ・キョルン（Neu-Kölln）の騎士塚に存在する——またスラーヴ民族のエンデ族もこのシユブレリーの谷に植民して居て、シユバンダウ附近、シユブレリー上流にその城壘があつたが

後にゲルマン民族に押し退けられた。但しシュエプ  
レー流域のフルステンワルデ(Firstenwalde)、キ  
ヨペニツク、シュトララウ(Strala)、ルムメルス  
ブルク(Rummelsburg)や、ハーフェル流域のシュ  
バンドウ、ポツダム(Potsdam)ブランデンブルク  
等はエンデの漁夫町を持つてゐたが、ベルリンに  
は存しなかつたし、キヨルンも亦恐らくは純エン  
デであると主張することはできないといはれてゐ  
る。

さて以上述べたやうに、シュブレーの谷は、地  
理上眞に好適の地であるから、その植民地が直  
ちに重要な地位を占めて、ブランデンブルク州の  
都市権を獲たのは當然で、第十三世紀の前半には  
今の舊伯林の地に、同時に二個の都市自治團があ  
つた。即ち一つはシュブレー河の左岸のキヨルン  
一つは右岸のベルリンで、前者の最古の記録は一  
二二七年(我が嘉禎三年) 後者のは一二四四年(寛

元二年) から始まつてゐる。この兩市は、東西と  
南北との重要な通商路の衝に當つてゐたために、  
急速力で盛大に赴いたが、久しい優越權の争の後  
一三〇七年(徳治二年)に合同して以來、この新し  
いキヨルン―ベルリン市は、エルベ(Elbe)並びに  
オーデル(Oder)兩河の間にある諸都市中で牛耳を  
執り、且地方の大地主の侵害に對して自ら強く守  
ることを得るやうになつた。

次いで第十四世紀は、現今のキヨルニツシエル  
フィツシユマルクト(Köllnischer Fischmarkt)及  
びモルケンマルクト(Molkemarkt)に中心點をも  
つたこの都市同盟にとつて、全體として光彩時代  
であつたが、第十五世紀の初になると、一部分は  
已にさほど活動的でなかつた市民自身の責任から  
この兩市の光彩は薄らいで商業は不振となつた。  
この衰微期に於てホーヘンツォルレルン家は、ブ  
ランデンブルク州に入り込んでキヨルン―ベルリ

ン市に來たが、當時の領主等にとつて都市の隆盛

は自己の政略的企圖に反するものであつたので、

まで續いて來た。

ホーヘンツォルレルン家は直ちにシュプレー都市の自由精神を制限して、これを無力な公共組合にさへ壓し下げることを得、而も善意を以て都市の共和的市民統治よりも、君主的專制政治の方が畢竟公安に有益であるといふことになつた。その結果、選舉侯フリードリヒ二世は一四四三—一四五一年（嘉吉二—寶徳三年）に、シュプレー沿岸のキョルン地域に一の城を築いて——その一小部分が現今の都城（もとの宮城）に保存されてゐる——兩都市の連結を解いてしまつた。この城が彼れの後繼者の一人即ちヨハン・チチエロ（Johann C. Cap. 一四八六—一四九九年、即ち文明十八—明應八年）によつて居城に高められたが、爾後伯林即ち先のキョルン—ベルリンは、ホーヘンツォルレルン侯の首都として、一九一八年の世界戰爭

ホーヘンツォルレルン家の君主は、市民の獨立

に對する獨裁的行動を姑くさしおいて、先づその

首都の發展を促進するやうに努めたから、宗教革

命及び宗教戰爭の後、大選舉侯フリードリヒ・キ

ルヘルム（一六四一—一六八八年、即ち寛永十八

—元祿元年）の治世に至つて、首都の繁榮がしま

つて來た。即ち伯林は西南フリードリヒスエルデ

ル（Friedrichswerder）區及び西ドロラーエンシュタ

ット（Dorotheenstadt）區へ擴張されて、和蘭式設

計に據つた城砦帶（堀と稜堡をもつた要塞圍壁）

が、北は今のノイエ・フリードリヒ街（Neue Friedrichstrasse）から、南はシュプレーを越えて殆どワ

ル街（Wallstrasse）の線まで續いた。また當時佛國

その他の國々から追放された、産業に従事する市

民の入國を援助したために、生活や商業が頓に盛

況を呈し、且藝術に關しても、藝術品の蒐集並び

に

に市の外観の裝飾について投資することが始められた——殊に後者に於ては大選舉侯の受けた教育とその結婚の關係から、和蘭式を模範とした。

更に下つて大選舉侯の後繼者等の下に、王都キヨルン—ベルリンは一七〇一年(元祿十四年)以來西フリードリヒシユタット(Friedrichstadt)區を越えて擴がつて行つたが、外面的には尙存立してゐた兩市の行政上の分岐は、遂に終結を告げて一七〇九年(寶永六年)以後は再び、一人の市長を戴く統一自治團體たる伯林といふものが出來、且城砦が撤廢された代りに十四<sup>キロメートル</sup>籽の長さの堅固な税關柵(個々の昔の市門間を連ねる現今の街路の線に準じて造られた)が、伯林を取り巻くことになつた。加之伯林は<sup>キツセンシヤフトのアカデミー</sup>科學大學の創立、及びその第一次の總長たる多方面な學者ライブニツツ(Liebnitz)によつて科學的の評判を得たのである。

然しその後フリードリヒ大王(一七四〇—一七

八六年、即ち元文五—天明六年)の治世の初に當

つて伯林は、建築物などの増大してゐたに拘はらず、人口正に十萬を有する素朴な、殆ど飾氣のない地方の都會に過ぎず、建築術もシユリユートル(Schlieter)の造つた大選舉侯記念碑のある長橋、宮城の新築並びに兵器庫(一七〇六年竣功)、その他二三の私有建物の埒外に出なかつたが、大王はポツダムに住んでゐたけれども、熱心に伯林の外観を一層美化することに配慮して、クノーベルスドルフ(Knobelsdorf)の手で歌劇座を、他の名匠達の手で<sup>アルテ・ヒェアリオテーク</sup>舊圖書館(今大學講堂)、ジャンダルメ<sup>デーム・トウルム</sup>ンマルクト(Gendarmenmarkt)にある兩大寺塔、ハインリヒ王子宮(後一八一〇年以來は<sup>ウニヴェルジテット</sup>大學)及び莊嚴なヘドキヒ(Hedwig)會堂などを建てさせ、また支拂能力ある個人企業家に命じて、その新築の店舗や住宅の正面を藝術的に飾るやうにさせた(現今も尙フリードリヒシユタットに在る種々の

建物がこれを證明する。當時の伯林は經濟的にも七年戰爭の災禍にも拘はらず特に銀行業（海外貿易、普露西國立銀行）、産業（蠶業、機業）、商取引などの隆盛によつて繁昌した。その後、ナポレオン及び獨立戰爭（一八一三—一八一五年）を以て特色ある時代への過渡期に於て、注目に値する出來事としては、大王の嗣フリードリヒ・キルヘルム二世（一七八六—一七九七年、即ち天明六—寛政九年）の代に、ランクハウス（Langhaus）のブランデンブルク門が一七九三年に建てられたことである。

次いで獨立戰爭前後に於ける危急と屈辱とによつて覺醒された、大きな内外の力は勿論伯林に於て最も強く認むべきであつて、科學や藝術上にも亦新しい春を齎したが、それは一八一〇年（文化七年）の大學創立に始まつた。即ちフイヒテ（Fichte）を最初の總長とし、フムボルト兄弟、へ

ーゲル、シュライエルマツヒエル、サフニ、リツテル、ビヨツク等夥しい有名な學者を教師として、初年に於て既に盛なものであつた。藝術關係にあつても、シンケル（Schinkel）が居つて古典的の建築様式を革新し、煉瓦應用のゴチック風を輸入して、伯林の建築術に有利な影響を與へたが、ジャンダルメンマルクトの劇場、舊博物館キヨリニヒスワフヒエ、アルテ、パウアカデミー、近衛兵哨所、舊建築學校、フリードリヒ・エルデル會堂、ポツダムのニコライ會堂などはその様式の例である。この頃また最初の大博物館、即ち上記の舊博物館が開かれ、記念碑裝飾も數多く造られた、その間に人口は増加して、第十九世紀初に辛うじて二十萬であつたものが、三十萬以上上つた。尤もそれには、ポイト（Beuth）によつて活動力を強められた工業が、與つて力がある。一八三八年（天保九年）に至つて伯林には、ほん今のポツダメル停車場の地點にあつた甚だ原始的な停

車場を起點として、ポツダム市に至る最初の鐵道が出來た。

一八四〇年以後、伯林は一八四八年(嘉永元年)の政治的紛擾に拘はらず、藝術を愛好したフリードリヒ・キルヘルム四世(一八四〇—一八六一年)即ち天保一一(文久元年)の下に、よく釣合のとれた擴張を見るやうになり、藝術的建築による外觀の美装は恐らくあまり大仕掛すぎるほどに企てられたが、シユテューレル(Schüler)カー・エフ・ラウハウス(K. F. Langhaus)、シャドウ(Shadow)ラウハ(Rauch)などの名匠が遺した注目すべき作品は新博物館、キルヘルム一世皇帝宮、宮城の圓頂閣、フリードリヒ大王記念碑(君主の大記念碑)中で、平均價值以上を持つもの、第二に位する)等である。但しこの王が宮城前の遊園附近を、羅馬風藝術で裝飾しようとした大計畫は實行されなかつたに反して、當時ポツダム地方には伊太利

風建築の種々なる藝術的殿堂—ザクロウ(Sakrow)附近の救世主會堂、ポツダムの平和會堂、未完成のプイングストベルク(Pingstberg)展望閣など—が造られて、その風光に驚くべく良く調和してゐる。また經濟的にはキルヘルム一世(一八六一—一八八八年、即ち文久元—明治二十一年)の即位後、一八六四年と一八六六年との(丁抹と塊太利とに對する)戰勝の結果、好景氣が特に産業の發展を來して、伯林の人口は一八六一年に五十萬、一八七〇年には已に八十萬に達した。

更に統一戰爭の經過によつて、從來普魯西王國の首都に過ぎなかつた伯林は、新獨逸帝國の帝都となつたから、未だ曾て豫想されなかつた早さで發展し、市の領域を取り圍んで居た近い廓外市の境界を越えて、隣接村落の方へと擴がり、直ちにこれらを併合してしまつた。従つて二十年以内に人口は二倍になると共に、交通のための數多の建



設物——アンハルター(Anhalter-)、ポツダーマア

(Potsdamer-)、シユテツテイナア(Seitiner-)、レー

ルター(Teichter-)停車場などの終點驛——や、世

界的大都市の交通機關たる市街鐵道が(一八八二

年、即ち明治十五年)に出來上つた。

而も普佛戰爭後濫

興した泡沫會社の

發起人等の淺薄な

豪奢趣味に拘はら

ず、藝術的發展も

亦停滯せずに進ん

でアルブレヒト

(Albrecht) 皇子街

及びインヴァリデン街(Invalidenstrasse)の兩博

物館、參謀本部、陸軍大學、工科大學など

共に、一八七五年(明治八年)に國民畫堂の莊嚴な

建物が落成した。

次のフリードリヒ三世の治世は、僅かに三ヶ月

許(一八八八年、即ち明治二十一年)に過ぎなか

つたので、伯林の藝術及び商業が一層隆盛に赴く

だらうといふ期待

も空しく、その後

を承けたキルヘル

ム二世皇帝(現廢

帝)の勢力の下に、

また帝都の發展が

始まつて、伯林は

終に世界的大都市

となつたのである

が、これは最近世

の事に屬するからこゝには省略しておく。

二 舊伯林の遺蹟

舊伯林(詳しく言へばキヨルンベルリン)の



圖 二 第

遺蹟と一口には言ふものゝ、實はその觀察の見地

る第十六世紀の初に建てられた胡桃樹側の料理店

に應じて歴史的のもの、藝術的のもの、文學的のものといふやうに、それ／＼分類せられるべきであるが、ともかくその總數に於て決して尠くない。その中でも柏林市中最古といはれる、第十三世紀開基のニコライ會堂 (Nikolarkirche) をはじめ、マリ



6. ALT-BERLIN. Der Hohe-Steinweg war die erste, mit Steinen gepflasterte Straße im alten Berlin. Haus Nr. 15 aus der Zeit des großen Kurfürsten. Nr. 1-3 aus der Zeit Friedrich des Großen.

(Restaurant zum Nussbaum

第二圖) 同世紀の半頃にミハ

エル・コールハーゼ (Michael

Kohlhase) をいふ追剝の住ん

だを傳へられる同じ街の家

第 (實はクライスト作の Michael

Kohlhase 物語とは無關係だと

三 いふ)、フリードリヒス運河通

圖 (Friedrichsgracht)、バロキア

ール街 (Parochialstr.)、ペトリ

街 (Petistr.)、最初の舗石路ホ

ーヘル・シユタイン通 (Hoher

Steinweg 第二圖) なつに残る

大選舉侯時代以下、フリード

リヒ・キルヘルム一世、フリ

呼ばれる)、フィッシャー街 (Fischerstrasse) にあ

ードリヒ大王等の時代の住宅——その中で縦に長

くて横に狭いのを俗に手拭ハンドツフと呼ぶ。例へばグロ  
セ・プレジデントン街 (Grosse Präsidentenstr.) にあ  
る家などは高さが四階で、間口は僅かに二米半メートルで  
ある——や、栗鼠の形と一六〇四年といふ日附あ

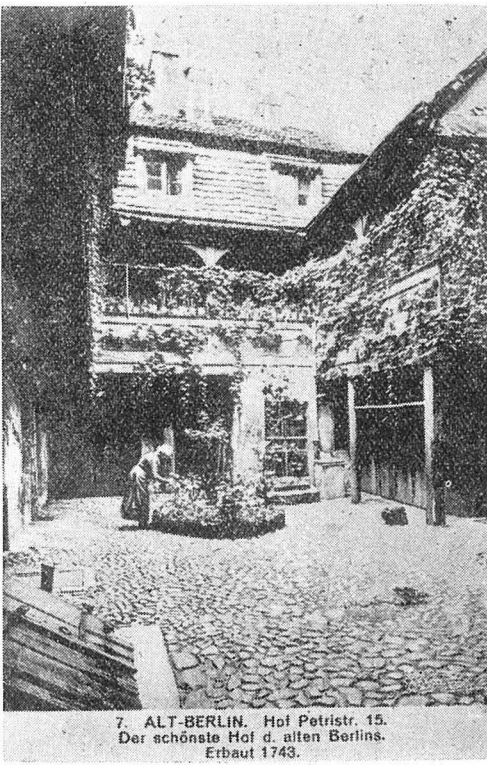
る銘とを彫つた石  
の門標を持つた、  
フィツシヤア街の

栗鼠屋と號せられ  
た家、(Haus zum  
Eichhorn) のみす

ばらしい玄關、當  
時伯林市中で最も  
美しいと言はれた

ペトリ街の猫額大  
の中庭ホーフ(第四圖)、キヨルナアの住んだフリユーダ

ア街 (Briderstr.) の家(今レッツシング博物館)、レッ  
シングの居つたシュバンダウア街 (Spandauerstr.) の



7. ALT-BERLIN. Hof Petristr. 15.  
Der schönste Hof d. alten Berlins.  
Erbaut 1743.

圖 四 第

家、クライストが自殺する事まで滞在したマウエ  
ル街 (Mauerstr.) の家、といふやうな由緒附きのも  
のは(第五圖参照)、藝術的價値の有無を姑く措い  
て大に史的興味に富んで居る。

次にこの種の遺

蹟中で、興味ある  
逸話や傳説の存す  
るものに就いて説

明を試みよう。  
(イ) 贖罪十字架ジュリーネクローツ

Sühnekreuz  
(第六、七圖)

キルヘルム皇帝  
街 (Kaiser Wilhelm

Str.) のルーターア記念碑附近にあるマリア會堂は、  
第十三世紀の末に建立されたもので(後第十四世  
紀に改築され、また第十八、九世紀に大いに修繕

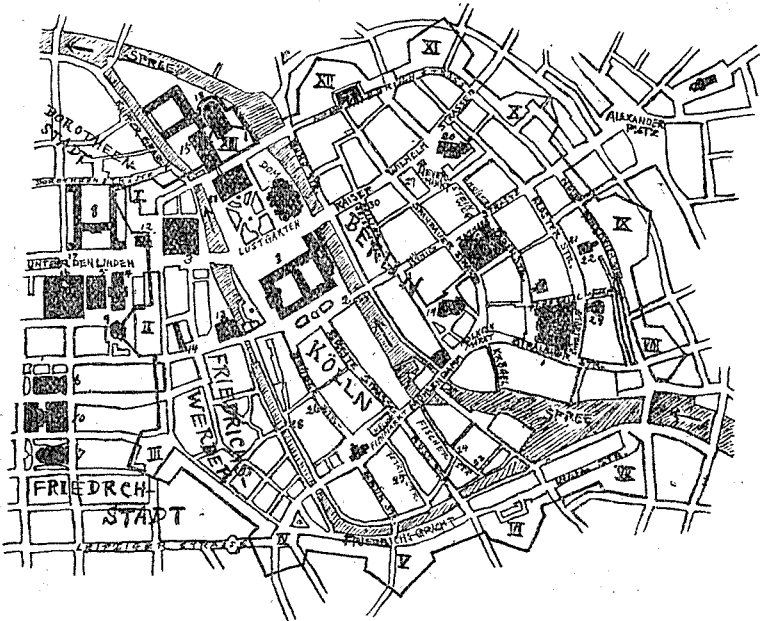


圖 五 第

1. 都城 Schloss. 2. 長橋 Lange Brücke 3. 兵器庫 Zeughaus 4. 歌劇座 Opernhaus
5. 舊圖書館 Alte Bibliothek 6. 7. 佛獨兩大寺圓頂塔 Domturm 8. 大學 Universität  
(もみハインリヒ王子宮 Palais des Prinzen Heinrich)
9. ヘドホキ會堂 Hedwigkirche 10. 劇場 Schauspielhaus
11. 舊博物館 Altes Museum 12. 近衛兵哨所 Königswache
13. 舊建築學校 Alte Bauakademie 14. フリードリヒエルテル會堂 Friedrich-Werdersche Kirche
15. 新博物館 Neues Museum
16. キルヘルム一世皇帝宮 Palais Kaiser Wilhelm I. 17. フリードリヒ大王記念碑 Denkmal für Friedrich den Grossen
18. 國民畫堂 Nationalgalerie 19. ニコライ會堂 Nikolaikirche
20. マリア會堂 Marienkirche 21. 灰色修道院 Graues Kloster
22. 修道院會堂 Klosterkirche 23. くるみ屋料理店 Restaurant zum Nussbaum
24. コールハーセの家 Kohlhase-Haus さ栗鼠屋さ號する家 Haus zum Eichhorn
25. 最も美しい中庭 Der Schönste Hof. 26. キヨルナアの住んだニコライ家(今の  
レツシグ博物館) Nikolai-Körner-Lessing-Haus (Lessing-Museum)
27. レツシグの居た家 Lessing-Haus 28. 處女橋 Jungfernbrücke
29. バロキアール會堂 Parochialkirche 30. 嫉妬首 Neidkopf

されたが)古きに於てはニコライ會堂の次に位する。その塔内にある骸骨踊の壁畫は第十五世紀の作として有名であるが、塔の入口の傍に立つてゐる石の十字架もまた、殆ど六百年を経たもので、

von Sachsen)に屈從させようとして、此會堂の説教壇で勸誘演説を試みた際に、市民は激昂して彼れを會堂の戸口へ引き摺つて行つて打殺した上、附近の新市場(Neuer Markt)で屍を燒き捨てたが、

後に法王インノセン

ト六世が、市民をし

て贖罪のために償金

を出させ、且修道院

主を殺害した地點に

晝夜不斷の燈明を備

へた石の十字架を設

けしめたのである

(一三五五年)といふ

——但し實はこの十

その前面に現存する五箇の孔は昔、不斷の燈明の鐵棒を挿し込んだ跡であるといはれる。

さてこの十字架

に就いて種々の物

語が傳へられる中

で、普通に信せら

れてゐる傳説によ

ると、邊疆伯時代マルクグラフにベルナウ(Bernau)の修道院主

ニコラウス(Nikolaus)が、キヨルン—ベルリンの

市民をザクセンのルドルフ侯に(Herzog Rudolf

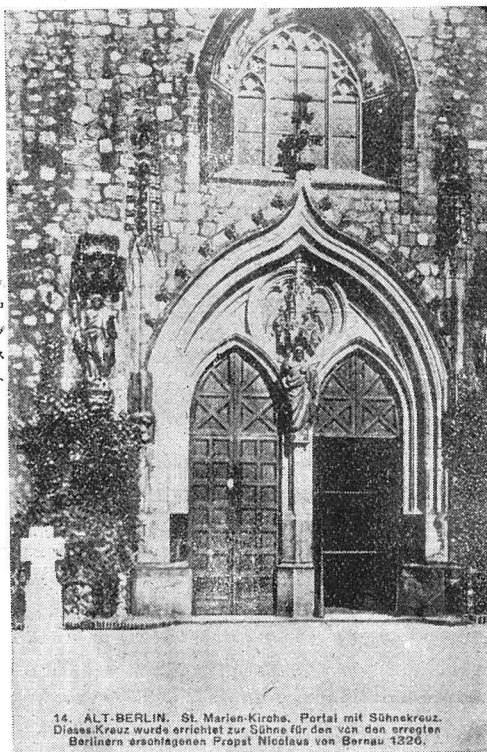


圖 六 第

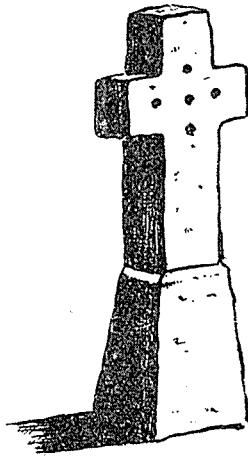
字架と院主殺害との關係は假想に止まるともいはれてゐる。

然し別の傳説によると、建築師がこの會堂を殆

ご完成した時に、彼れは悪魔に魅せられて祠堂金を骨牌遊びに消費した。悪魔はその金を總べて返してくれたが、その代りに寺の圓天井を建る時に故意に缺點をこしらへておいて、献堂式の日に信者の上に崩壊するやうにたくらむことを、悪魔に約束せ

ざるを得なかつた。

然しこの建築



第七圖

師は悪魔を欺かうと決心して、圓天井を正規通りに造つたから、献堂式の濟んだ時に悪魔は彼れを戸口に待伏せして、最後に出て來た彼れに飛びかかつて頸を撚ちて殺してしまつた。その記念としてこの十字架が立てられたのであるといひ、また或説には、號筒手チンケツレーゼが寺の竣功後の第一日曜日に

神の榮光のために歌を吹奏しようとして朝早く塔に登つたのを、悪魔が憤つて塔から投げ落したところが、突風が此人の外套を吹き膨らせたために彼れは穩やかに地上へ滑りおりることを得た。この好運な救命を記念するために後にこの十字架が設けられたのであるともいふ。

(H)日時計 ソウネンウール Sonnenuhr (第八圖)

モルケンマルクトの斜向にシュプレー河岸へ通ずる小路があつて、その奥にある伯林最古の商業路地をクリヨイゲル (Kriogel) と呼ぶ。第十六世紀の建設で二つの中庭ホフに別れてゐるが、その中間の建物に一つの日時計が備へ附けられあつて、その銘に

*Mors certa, hora incerta.* (死は確定であるが、その時は不確定である)

と記されてゐる。この拉丁語の銘を翻譯して俗に「時計は確かに正確に動かない」とか、「時計は死

の如く確かに不精確に動く」とかいふし、またクリヨール青年は「日が照れば動かし、月が照れば止まる」と意譯した。この時計は進みも遅れもないから、これ以上正確に時を示す時計は伯林中に無いわけである。

モルケンマルクト十三番地、即ち昔のボルレン小路 (Bollengasse) の角にある家の壁に、マンモス (前世界の巨象) の大きな肩胛骨と肋骨とが懸つて



圖八

ある。これは多分古い旅宿の看板であつたのであらうが、傳説によるとミユツゲルベルク山脈 (Mittelberg) の巨人ロベルト (Robert) の骨であるといはれる。即ち彼れは漁夫の若い娘ヘルタ (Hertha)

至五十年以上の借手が居たもので、例へば一九一四年に祝賀を受けた老洗濯婦などは、六十五年間同じ家を賃借したといふ。

を奪つて逃げたので、許婚の夫テオバルト (Theobald) といふ美丈夫が、その大きな足跡をたよりに追つかけて行つて斬り殺した上で、その重い體

を舟で伯林へ持つて歸つたが、七日間見せ物にした後に埋葬するに當つて、一箇所の墓地へ埋めるにはあまり巨大であつたから、已むを得ずその體を七片に切つて、あちこちへ分葬した。さうして

あとに唯二つの骨を保存して、この家の目印としたものであるといふ。

(ニ) 處女橋

Jungfernbrücke

(第十圖)

フリードリヒス運

河下(大選舉侯時代に

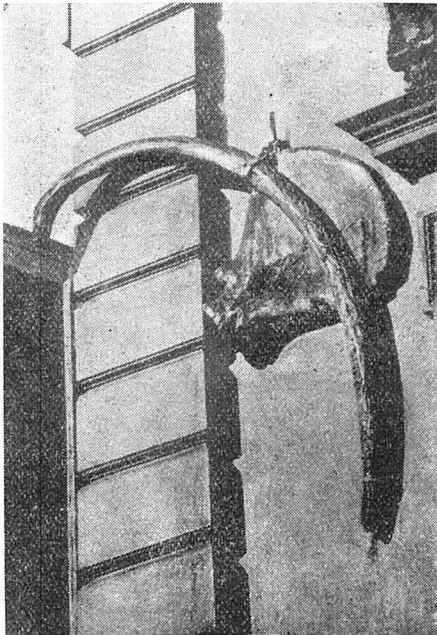
開鑿された)に架けられた和蘭式の短い橋で、伯

林最古の且最後の木製吊り橋である。その名の由

來に就いては諸説まち／＼で、或は佛國から亡命

して來た新教徒ブランシエ(Blanchet)の九人の娘

たちが、多辯のために結婚もできず、一生獨身で暮してゐたのから起るとも(但しこの名は亡命者の表には見當らないといふ)、或はシュプレー下流にある騎士橋カヴァリアブリュッケ(Kavalierrücke)に對する名に過



4. ALT-BERLIN. Schulterblatt u. Rippe eines Riesen-Mamuths, am Hause Holken-Markt No. 13.

第九圖

ぎないとも、或は處女マリアに基づくとも、或は排水を行はれる久しい以前に、魔女が流しの池に用ゐたのに由るとも言はれるが、古傳説の一つには次のやうに語られてゐる。

昔この橋の對岸にある三階建てで間口の廣い、俗に佛蘭西屋敷と呼ばれた家(フリードリヒス運河通六十一番地)に、大選舉侯から招かれた佛蘭西の移住民が住んだが、その中にレース細工をする



ことの巧な婦人たちが居て、この所謂ドモアゼル

らしい、放たれた鳥の如き二人の娘をつれて移つて来た。姉のルイズは眞面目な鍛

(Demoselle) 即ち處女<sup>ユングフェル</sup> (Jungfer)

が、その製品を賣るために官

工徒弟グスタヴ (Gustav) を愛してゐて、或時一緒に舞踏に行きた

許を得て、顧客に便利なやう

なかつた。然し若者はそれを賛成し

にこの橋の傍に木造の假小

なかつたので、愛人たちは膨れ面

舎を設けたから、當時まだ名

を<sup>を</sup>して酒場から歸路に就いたが、

の無かつたこの橋を、俗に處

途中で終に喧嘩をはじめて、グス

女橋と呼んだのが今に傳はつ

ターヴはルイズを獨りで歸宅させ

たのであるといふ。

た。そこで老バルタザアは彼女を

また他説によると、この佛

第十圖

待伏せして結婚を申し込んだけれ

蘭西屋敷に裕福で信心なカス

ども、彼女はそれを強く拒絶した

パ・バルタザア (Caspar

ので、老人は女を絞殺してその死

Balthasar) と呼ぶ、一人の老

骸をシュプレー河に投げ込んだ。

獨身者が家政婦と共に住んで

ところが近所に住んだ一人の盲人

ゐたが、まもなくまたルノー

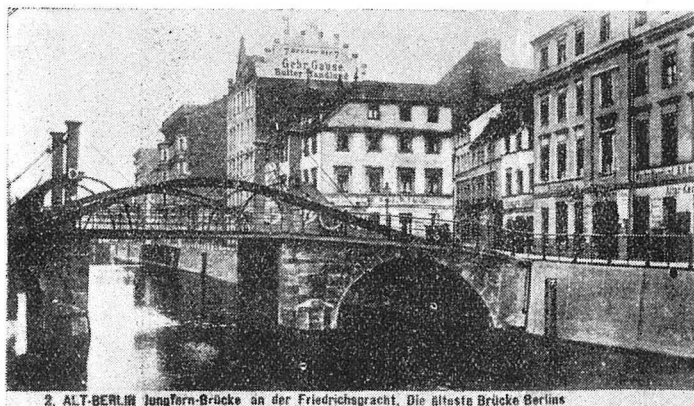
がその水音を聞いて、老人に何事

(Renand) といふ佛人鍛工が、

が起つたかと思ふと、老人は壁石が雨で弛んで屋

ルイズ (Louise) のユージェニー

(Eugénie) と呼ぶ愛



2. ALT-BERLIN Jungfernbrücke an der Friedrichsgracht. Die älteste Brücke Berlins

根から河中へぬけ落ちたのだ、と何氣なしに答へておいた。その後ルイズの屍が発見されてから、裁判の時に第一の嫌疑がかの眞面目な徒弟に懸つたのは勿論で、彼れは冤罪を宣誓したに拘はらず死刑の宣告を受けた。

その際突然、死者を知つてゐる總べての隣人たちを尋問するといふ動議が提出されて、老バルタザアも亦召喚されたが、彼れは「自分がその若者に就いて知つて

ゐる事は、これより外に何も無い」と當惑しながら證言すると、背後から聲があつて、「殺人者は彼れではなくてお前だ」と答へた。それはこの殺人者を聲で覺えてゐたあの盲人であつたのである。

そこでバルタザアは、否認の甲斐もなく死刑を宣告されて、かの徒弟は救はれた。その頃からこの無名の橋が今の名を得たといふ。

(ホ) 吼へなくなつた獅子像(第十一圖)

クロスタア街 (Klosterstr.) とパロキア

イル街との交叉點にあるパロキアール會堂 (Parochialkirche)

第十圖  
は、第十八世紀の初に竣功したもので、

高さ六十六米餘の塔内にはフリードリヒ・



キルヘルム一世の命によつて、和蘭風の鐘樂が備へつけられてゐる。それは三十七個の大小の鐘から成立つて、今でも一時間毎に調子の良い讚美歌曲を奏するので有名であるが、その塔の四隅に造

られた獅子像に就いて一つの逸話が傳へられる。

初は鐘樂が終るとこの獅子も吼へたもので、その数によつて市民が何時であるかを知ることのできるやうに工夫されてあつたが、市の役人は、この名匠がまた第二

のものを餘所に造ることを恐れて、

彼れの目を抉り取

らせた。そこでこ

の盲人は、塔の上

に道具を忘れて置

いたからそれを取

つて來るために、

もう一度獨りで塔

に登りたいと乞うて、その時計仕掛の螺旋の一つを燃つてしまつた。それからは時計は歌曲を奏するが、獅子はもはや吼へなくなつた。その後時計

製造人にこれを修繕させようとしても、誰も缺陷を發見することができなかつたので、現今でも尙

この獅子は沈黙してゐるのであるといふ。

(ハ) 嫉妬首 <sup>ナイドコツツ</sup> Neidkopf (第十二圖)

ハイリーゲ・

ガイスト街 (Hei-

lige Geist Str.)

三十八番地の家

の、道路に面し

た二階にある装

飾で、蛇の髪を

戴き、萎びた乳

房をぶらさげて

舌を出した婦人

の胸像である。フリードリヒ大王の父で軍人王

と呼ばれた、フリードリヒ・キルヘルム一世は常

に淋しい町を徴行して、不正な事の起らないやう



4. ALT-BERLIN.

Der Neidkopf am Hause Heiligegeiststr. 38. Zur Zt. Friedr. Wilhelms I wohnte in diesem Hause, ein armer Goldschmied, ihm gegenüber ein reicher Konkurrent. Da der König seine Gunst dem armen Goldschmiede zuwandte, erregte dies den Neid des Reichen u. seiner Frau. Als der König erfuhr, daß die Frau ihrem Gegenüber stets die Zunge heraussteckte, ließ er zur Strafe derselben, den noch heute an dem Hause befindlichen Neidkopf anbringen.

圖 二十 第

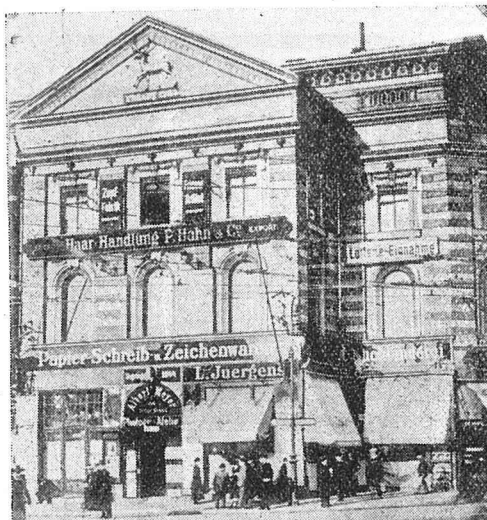
に監督し、また職人などの仕事するのを見廻る習慣をもつてゐた。或時王は熱心に働いてゐる貧しい鍛工が、儲けの無い苦痛を訴へるのを聞いて、同情のあまり彼れに仕事を多く注文したが、その

ためにこの鍛工は向ひに住む金持の同業者の羨望を招くやうになつた。

特にその同業者の妻は、この鍛冶屋の顧客が非常に増したことを嫉んで毎日彼れに醜い澁面を作つて見せたが、或日王はこれを見てその婦人を罰しようと思ひ、この正直な鍛工のために美しい大きな家を新築してやつて、瘦せた髷め面をした婦の首の彫

像を二階と三階との中間に飾り附けさせた。爾後この嫉妬深い婦人は自分の醜い似姿を、始終目の前に見ることになつたのであるといふ。

(ト)九十九の羊頭(第十三圖)



9. ALT-BERLIN. Das Haus mit den 99 Schafsköpfen. Alexanderstr. 45. Erbaut 1763. Frieser d. Gross beschenkte diejenigen Bürger, welche sich um Staat u. Stadt verdient gemacht hatten, mit Häusern. Der erste Besitzer abigen Hauses halfte der Stadt u. d. Armen grössere Zuwendungen gemacht u. bei dieser Gelegenheit geäussert, dass er dafür vom König ein Haus ganz besonderer Art erwarte. Der König, der dies erfuhr u. sich darüber ärgerte, beschloss ihn dafür zu strafen. Er liess einen Architekten kommen u. nach seinen Angaben das noch heute stehende Haus erbauen u. an den Fenstern u. Simsen 99 Schafsköpfe als Verzierung anbringen. Als sich der Beschenkte beim König bedankte, frag ihn der König, wie ihm das Haus gefiele. Oh sehr gut, sagte der Bürger, nur die Zahl 99 ist etwas unvollkommen, die runde Zahl 100 wäre mir lieber gewesen. Da sprach der König: Stecke er den Kopf zum Fenster hinaus, dann ist das Hundert voll.

圖三十第

アレキサンダア街 (Alexanderstr.) 四十五番地 (廣場の傍) に一軒の立派な家がある。老フリッツと呼ばれるフリードリヒ大王の建てさせたもので、その家の窓や軒の蛇腹に裝飾

として羊の頭が總計九十九箇附けられてあるが、それにはかういふ由來がある。

嘗て大王が或善良な市民に賞與として、アレキ

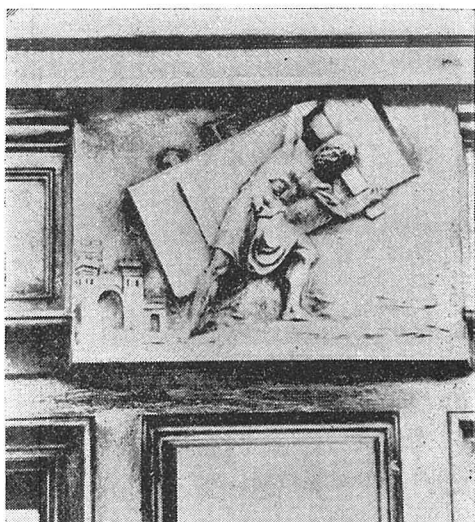
サンダア廣場(Platz)の側に家を建て、やつて、その外部を多數の彫像で飾つた。その隣に住んだ物羨みをする富裕な男が、自分も同じやうな方法で表彰されたいと思つて、貧乏人に物を與へなごし

て王の注意を自分に向けさせようとし、加之終には家を建て、ほしいと

王に乞うた。この希望は直ちに聞き届けられたが、その家の落成した時

(一七八三年といふ)、或日老フリツ

ツはこの新しい家を自身で檢閲することを思ひついた。所有主は王を戸口で迎へたけれども、さも悄然たる顔をして居たので、王は終に「お前は何



9. ALT-BERLIN. Der Schuster im Glück. Relief am Hause Wallstr. 25.

Hier wohnte vor vielen Jahren ein armer Schuhmacher, welcher, wie viele Berliner sein Glück in der Lotterie versuchte. Aber eine Ziehung nach der Anderen verging, doch das erhoffte Glück blieb aus. Teilweise aus Ärger hierüber, teilweise aus Vorsicht, das neu gekaufte Los zu verlieren, beklebte er seine Stubentür mit den verfallenen u. den neu gekauften Losen. Doch eines Tages kam die Nachricht, daß das Grosse-Los auf seine Nummer gefallen wäre; in seiner Freude nahm er sich nicht die Zeit das Los von der Tür zu lösen, sondern er hob die Tür aus den Angeln und ging damit nach dem Lotterie-Kontor.

第四十圖

を不満に思ふのか」と問うた。そこで鐵面皮な此男は直ぐに答へて、「さればでございます陛下よ、あそこのあの家は屋根の上に人形の飾を持つて居りますのに、私のはこんなに何も無くて貧相でござ

います」と言つたので、王は「お前も何かを獲られることになつてゐる」と言つて美術家に委託して、此家の周圍に九十九個の羊頭を附けさせた。さて王はその所有主に手紙を送つて、その中に「こ

の九十九個の羊頭でお前は多分満足するだらう。若しお前が窓から自分の頭を申し出したら、ちやうど「百になる」と書いたといふ。

(チ) 幸運な靴屋(第十四圖)

ワル街二十五番地の路地内にある家の戸口の上に、扉を背負つた男の浮彫がある。嘗てこゝに住んだ貧困な靴製造人が、多くの伯林人のするやうに富籤で一攫千金を試みようとしたが、抽籤はだん／＼進んで行つても幸運は一向やつて來ないので、半ばは憤懣から半ばは紛失せぬ用心から、彼れは新しく買つた籤札を、效力を失つた札と共に部屋扉に貼り附けて置いた。然し或日、大きな籤が彼れの番號に中つたといふ通知を受けたので彼れは驚喜のあまり、籤札を扉からはがす時間をも惜しんで、扉の絞番を外づして富籤事務所へそれをかついで行つた記念であるといふ。

以上は舊伯林の遺蹟中で最も人口に膾炙した傳説由緒を持つたものであるが、別に特殊の來歴も無くて、たゞ時代の古いといふだけで有名なものが多い。尤もいくら古いといつても漸く第十三世紀(我が鎌倉時代)頃で、大部分は第十七世紀(我が江戸時代初期)以後の遺蹟であるから、我が國など

は到底比較にならないけれども、日曜日などにこの邊を逍遙すると、必ず遺蹟巡りをする團體に幾組も出會ふし、母親らしいのが同伴の兒童に由來を説明するのも聞くし、また小學校の讀本にも載せて少年に深い印象を興へようとするのなどを見るも、古を懐ひ郷土趣味を養ふことの熱心さに感心せざるを得ないのである。(完)